2025 年度 テイヤール・ド・シャルダン奨学金懸賞論文
分断の深まる時代の「研究における精神の自由」とは

可視化された分断の時代に生きる研究者のあるべき姿

―テイヤールの思想から学ぶ精神の自由―

B2478157 棚橋　美紀（たなはし　みき）
理工学研究科　理工学専攻　生物科学領域

要約

本論文は現代社会の「分断の深まり」を、SNS の台頭により個人が他者を分類し、その違いを世界へ容易に拡散できるようになった結果生じる「可視化された分断」と捉え直すものである。これに伴う過剰なカテゴライズは他者を排除するだけでなく、「自分はどこに属するのか」を常に問い、主体のあり方までも規定してしまう。研究現場においても、評価・制度や分野・分類といった外的要因が研究者の精神の自由を無意識に制限し、自由で独創的な発想の形成を妨げている。

この状況を理解するために、テイヤール・ド・シャルダンの思想を読み解く。テイヤールは、思考を「新しい空間に浸透しながら、より深く自己に集中すること」とし、思考力による普遍的な骨組みが自身の中心に存在するからこそ精神は自由に伸び広がることができると結論づけた。また新たな発見を生む独創力は、他者や周囲の正解を自己の中心に取り込みつつ深めていく過程である人格化から生まれると定義した。

本論文は、分断の深まる現代に研究者が取るべき態度として「メタ認知」を提唱する。これは、外的要因が自らの思考を縛りうることを自覚し、距離を保ちながら自分の興味関心へ深く潜り続ける態度のことを指す。このメタ認知は分断の時代における精神の自由の核となる。さらに、分断は他者との差を通じて自己を内省する契機ともなりうる。分断の時代を利用して自己を深める重要性を示した。

結論として、分断の深まる時代における研究の精神的自由とは、外的要因の存在を認めつつもそれに無自覚に従わない姿勢であり、他者を排除することなく自らの中心を深めていく人格化の営みである。研究者がこの精神の自由を守り抜くとき、研究は新たな発見を生むだけでなく、社会に「異なるものを受け入れつつ自己を深める態度」を広げ、分断を超えた共生の基盤をも形成しうる。

１序論

初めに、この論文では「分断の深まる時代」を現代社会と定義する。その上で現代社会における分断とは何か。昨今ニュースや新聞で良く見かける「分断」といえば経済的・政治的・文化的・価値観的・国際的・心理的分断などだろう。もう少しミクロに見ると、これらは所得格差・イデオロギーの二極化・ジェンダーや宗教・世代間における差・領土争いに伴う戦争・社会からの孤立など様々である。このように列挙すると世の中の（広義には地球全体の）問題は全て分断に帰結するということに気がつく。そんな分断が引き起こす万物の上に生きているのが現代社会の我々なのである。

私はこれらの分断が「深まる」時代を現代社会と定義した。しかし、戦争をはじめとする分断による対立は遥か昔から今現在まで半永久的に続いている。何百年、何千年もの間続く、ある意味普遍的な分断が「深まる」とはどういうことだろう。

分断が「深まる」時代である現代社会が過去とどのように異なるのか、私には１つの仮説がある。それは自己と他者との違い、言わば分断を全世界に提示し、認識させるという行為や権利が個人に与えられ、それを誰もが容易に行使できる時代であるということだ。SNS が台頭している現代社会では[1]、自己と他者の区別をいとも簡単に全世界に発信できる。また同じような考えを持つ人々とすぐに繋がることができる。これにより自己の主義主張が一様に正しいのではないかという錯覚に簡単に陥ることができるのである。さらには他者を完全否定し、排除しようという動きも活発になってきている。共生を許さず自己以外の考え方を持つものは一定に悪だとみなす風潮が高まっていると感じる。

このような分断を煽る行為を世界に広げる危うさを、個々人が持ってしまっていることが分断の深まりの最大の原因であると考える。

次に研究における精神の自由について考えたい。まず初めに「研究」とは何か。広辞苑[2]によれば「よく調べ考えて真理をきわめること」である。私は研究の中でも特に学術機関における基礎研究と呼ばれる分野の研究を行っている。そのため物事を深く考え追求し、まだ世の中に定義されていない現象を定義することが研究の大いなる意義であると考える。他にも応用研究、企業での研究、主題について自分の中に深く潜り熟考することもまた広義の意味の研究と言えるだろう。私自身の研究も「この結果を出すことは何に繋がるのか、仮説は正しかったのだろうか」と自問自答を繰り返しながら進んでいる。

約３年間の研究を通じて感じたことは、「研究は自身の興味を掘り下げることでしか進まない」ということである。実験で得られたデータの指し示す先に興味がなければそれ以上データを分析したいとも思わず、また新たなデータを取りたいとは思わない。自分の興味の赴く方向に深く、深く思考を広げることが手を動かしデータを取ることに繋がり、真理をきわめることに繋がるのだと考える。そのため「研究」において精神が自由であるということはかなり重要なトリガーになりうるのではないかと考える。何者にも縛られない精神の自由があるからこそ、自己に深く潜り、自身の興味にしたがって様々な発見を成し遂げられる。何かに精神が縛られた瞬間、思考が柔軟性を失い研究が停滞するということを実際に嫌と

いうほど経験した。
　では一体研究における精神の自由を分断が深まる現代社会で実現するとはどういうことか、またどのような意味があるのか。この論文で考えていきたい。

２本論

2-1 分断の深まりと自己の変容

　先に述べた通り、分断はどの時代にも消えることなく普遍的に存在する事象であると考えられる。しかし SNS の台頭により、現代の分断は従来に比べ、誰もが認識できる位置に拡散されているため、より「可視化された分断」だと言えるだろう。さらには認識できるだけでなく、個人に分断の拡散能力が付与された。すなわち個人がそれぞれに他者を分類し、その違いを主張し、自分以外の考え・他者を否定するという構造がいとも簡単に取れるようになったのである。これにより過剰なカテゴライズが進み、「どこに属するか」を常に問う風潮も出現している。分断の深まりにより、逆にカテゴライズされていないと不安を覚えるようにもなってきたのである。例えば友人関係において「私たち親友だよね」と発言することで、自分と対象である他者を親友というラベルで分類し、それ以外の他者と一線を画すことで自分の居場所を守るといった行為はよく散見される。これは研究でも同様である。学会に参加すると必ず「あなたの研究は薬理学なのか、神経科学なのか？」という質問が飛んでくる。そのどちらも包括しており、さらにはそれ以外の要素も多分に含んでいるものの何らかの分類に従わなければならない瞬間を多く経験した。本来は自己の自由な精神のもと、何にも囚われない自由な発想・着眼点を持つべきである。しかし過剰なカテゴライズ文化により、精神の自由が奪われる構造が出来上がってしまっていると感じる。分断の深まりによる他者の排除は過剰なカテゴライズを生み、考える主体であるべき自己のあり方まで決定づけてしまうのである。
　では、このような分断の深まる時代において自己はどのように自由でありうるのか。

2-2 自身の研究から見る「精神の自由」の危機

　実際の研究現場ではどのように精神の自由が制限されているのか、自身の研究経験から考えたい。3 年間の研究から、制度・評価による圧力が最も研究者の思考に影響を与えていると考える。研究費獲得・論文数・インパクトファクターなどを考えると、何でも自由に考えられていた時と比べ、思考が制限される。そして、どうしても「安全に成果が出そうなテーマ」に流されてしまう。しかし、評価される研究というのも世の中の流行に大きく左右される。例えば一昔前では低分子医薬品に大きな注目が集まり、私が研究している中分子・高分子医薬品はあまり注目されず、否定的な意見も多かったと聞いている。しかし現在では世の中の注目が中分子・高分子医薬品に移り変わってきたことにより[3]、「製剤化できるのではないか？」とのお声をいただくほどに評価軸も変化した。常に揺れ動く制度・評価による圧力に影響を受けながら進めるのが研究の性である。

また分断が深まることにより過剰なカテゴライズが進み、先に述べたような研究分野の決定を迫られることもある。他の研究者と話すなかで、「既存の分類では位置づけにくい」という理由だけで、思いついたアイデアを実際には検証しなかった例が少なくないことも実感した。枠のなかで考えなければならないという圧力により自由な精神が縛られる。

上記はどれも「他者からの評価」や「外面的な分類」、すなわち外的要因に精神が縛られている状態であると言える。私は、研究とは自身の興味に内省することでしか進まないと考えているが、現状のままでは外的要因によるバイアスが自由な精神で自己を内省するという行為を妨げて、ひいては研究の進捗を妨げているのではないか。

2-3 テイヤール・ド・シャルダンの思想から見る「分断」と「精神の自由」[4][5]

テイヤール・ド・シャルダンによれば、思考とは「新しい空間に浸透しながら、より深く自己に集中すること」である。研究における精神、すなわち試行錯誤という名の思考とは自己に深く潜り続ける行為なのである。また、周囲の正解を自己に集中させることで自己以外のものを取り入れて自己を深めていくという行為により人は人格化していき、高次の人格とは自己のうちに中心が確立しているものであるとテイヤールは述べている。すなわち現在の分断の深まりによって加速した、他者を否定し自分を正当化するという行為は人格化と真逆の行為なのである。自身を正当化し守っているようで、実は成長し高次の人格になる機会を自ら手放しているとも言える。思考力によって提供される普遍的な骨組みが自身の中に、中心的に存在するからこそ精神は自由に伸び広がることができ、また時には互いに結合し高次の人格になりうるのではないか。

またテイヤールは分断の深まりについて、絶望するだけのものではないと考えている。もしかすると分断の深まりにより自己と他者の違いが明確になることは、自己のいるカテゴリーを深く内省することに繋がり、それが突然新しい発見につながり側枝を広げ、いつの日にかその広げ合った枝が接合するかもしれない。崇高な歪みはまた真理のすぐそばに近づくかもしれないということである。我々がすべきことは分断を正しく理解した上で、他者や外に矢印を向けたり、社会の混乱を嘆くのではなく、もう一度自分の中に深く潜り、心の中を吟味することなのではないか。

研究の醍醐味は未知の事実を発見し定義することである。そのためには研究者それぞれの独創力が重要になる。テイヤールは、自己以外のものを取り入れて自己を深めていくことを人格化とし、独創力の極限は我々の個性ではなく人格から生まれると定義している。ただし各個人の中心群の結合が必要であることから、各中心間に介在するエネルギーを認め把握しこれを発展させねばならない。すなわち研究における独創力を育むには、例え自分と真逆な意見を持っている研究であったとしてもその研究者・研究を認めそれらの中心、核となる部分を取り入れながら自己を深めることが必要不可欠なのではないか。

2-4 研究における精神の自由の保護と分断の深まり

これまで述べてきたことは現在置かれている状況の分析に過ぎない。では実際に、研究における精神の自由を守るにはどうするべきか。私はテイヤールのさまざまな思考から、自分自身や他者の行う認知活動そのものをもう一段上から認知することを示す概念である「メタ認知」が重要であると結論づける[6]。制度・評価による圧力があること、過剰なカテゴライズがあることを改めて研究者が認識するということである。分断の深まる現代に外的要因を変えることは容易ではないし、おそらくこれから外的要因が大きくなることはあっても軽減・改善されることはないだろう。外的要因を改善するよりも、外的要因に自己の精神が縛られていると知ることが大事なのである。無意識のうちに縛られているという現状を理解すれば、これからは外的要因から解き放たれた自由な精神を持つことが、もしくは持とうという意識ができるのではないか。何者にも縛られない精神の自由を意識するからこそ、自己に深く潜り、自身の興味にしたがって様々な発見を成し遂げられる。研究における精神の自由とはそれ自身守られるべき権利であると同時に、研究者が自ら守り抜くべき「精神的態度」でもあるということだ。

また、逆に分断の深まりを利用するという方法もあるのではないか。分断の深まりにより、従来よりも個人がそれぞれの立場を明確に提示し拡散している。これを、今まで意識していなかった自己のいるカテゴリーを深く内省することに利用できるのではないか。他者を知ることでメタ認知能力も上がり、結局自己を深く知ることにつながる。特に研究は、それぞれが興味を持つ、ある意味ニッチな世界に深く入り込む作業である。周りとの差を知ることで、より自由に自分の世界に入り込むことができるのではないか。また、他者を知ることにとどまらず、他者に向かい他者の中心を取り込むことで高次な人格を築き、立派な研究者へと成長するのではないか。そのためには論文を読んだり、他の研究者と活発な議論を交わすことが重要である。実際に、私の専門である脳神経と全く異なる分野・立場である、膵臓の研究者との交流に自ら飛び込んでみた経験がある。それは、今まで当たり前に感じ注目していなかった神経と膵臓の相違点・共通点に目を向けるきっかけだった。得られた情報をもとに自身の研究を見つめ直し、結果として新たな発見を生み出すことができたのである。最後に自己に深く潜り思考を続けることを忘れなければ、分断の深まりを嘆く必要は研究においてはなく、むしろ分断をポジティブにすら捉えられる。

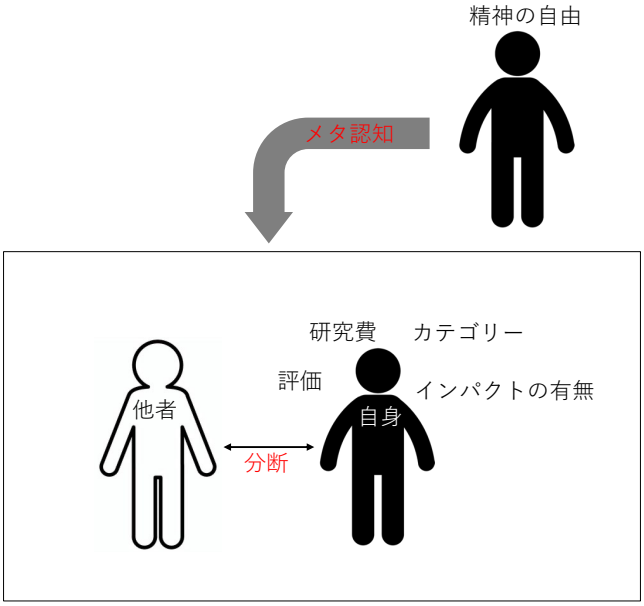

図１：研究におけるメタ認知

では逆に研究における精神の自由を意識し続けることは、分断の深まる社会にどういった影響を与えるのか。私は真の意味での「多様性を受け入れる」社会が実現できるのではないかと考える。自由な研究は異なる文化や立場を受け入れる姿勢を育み、社会に「異論を尊重する文化」を広げるのではないか。例えば、世の中の大学生の大半が卒業論文を書き上げる。その過程には研究の定義である「よく調べ考えて真理をきわめること」が不可欠である。ここで精神の自由を意識し、他者との差を理解し、他者に向かい他者の中心を取り込むことで高次な人格を築き上げる経験を積むことができれば、将来研究者にならなくとも、自然と異なる文化や立場を受け入れる姿勢が個人の中に形成される。研究における精神の自由を意識し続けることには、分断を超える共生の土壌を作る効果があると考える。

2-5 自身の研究を振り返って

この論文を執筆するまで３年間研究に没頭する日々を過ごしてきたが、実は研究における精神の自由について考えたことも悩んだこともなかったのが正直なところである。私は幼少期から頻繁に病院に通っており、その過程で脳の仕組みと薬の生体反応に興味を持った。自身の研究が病気の誰かを救う未来につながり誰かの助けになることが、私の叶えたい未来であり興味関心の赴く先である。現在は薬になる可能性を秘めた物質の脳神経細胞に対する作用を研究しており、幸運なことにこの研究内容は幼少期からの興味に少しのズレもなく一致している。また、当研究室には自身の仮説を自由に検証することが許される機材や資金環境が整っており、制度・評価に振り回されることもなく、伸び伸びと研究してきた。しかし、この論文を執筆する上で改めて自身の研究に関してメタ認知を意識したところ、上述したようなカテゴライズに悩まされ研究の方向性を見失いそうになったり、薬になるか

わからない物質の研究は果たして社会における意味はあるのか、評価されるのかと考えていたことを思い出し、私も知らず知らずのうちに精神の自由を守れていなかったのだと気づかされた。今後は今回の学びを活かし、メタ認知を実行しながら精神の自由を守り、また他者との違いを意識しながら自身の「病気の誰かを救いたい」という興味に従って自己に深く潜り、新たな発見を生み出すためにより一層研究に精進していきたい。

３結論

本論ではまず、現代の「分断の深まり」を単に対立が増加したということにとどまらず、個人がそれぞれに他者を分類し、その違いを主張し、自分以外の考え・他者を否定する、この構造を世界に向かって容易に拡散できるようになったことだと捉え直した。とりわけSNSの台頭によりカテゴライズ文化が加速し、「どこに属するのか」を絶えず問われる風潮が強まっている。この過剰なカテゴライズは他者の排除だけでなく、「分類されていないと不安である」という感覚をも生み、主体のあり方そのものを規定してしまう。研究現場においても、分野や評価指標といったラベルへの従属意識が自由な発想や仮説の設定といった研究に欠かせない精神を無意識に制限している。

これに対してテイヤールは、思考を「新しい空間に浸透しながら、より深く自己に集中すること」と捉え、他者や世界を取り込みつつ自己の中心を築いていく過程を人格化と呼んだ。分断の深まりによって加速した「他者否定と自己の正当化」は、一見自己を守る行為のようだが、実は人格化の機会を手放し、人格化に伴う精神の自由を自ら放棄するということになる。逆に、本論で指摘したような分断の深まりにより生じた外的要因が自己を縛る可能性があることをメタ認知し、距離を保ちながら自分の興味・関心に素直に潜り続ける態度こそが、分断の時代における精神の自由の核となる。

分断の深まる時代の「研究における精神の自由」とは、分断に逆らい無理やり中立な立場をとりながら研究を続けることを意味しない。過剰なカテゴライズや評価等の外的要因が存在することを認めつつ、それらに無意識に従わないことである。また、他者や異なる立場の研究を排除するのではなく、それらを自らの中心に取り込み、なお自身の問いや興味に向き合い続けていく、テイヤールの言葉を借りれば、「人格化」の営みとして理解するべきである。このような精神の自由を研究者が自ら守り抜くならば、研究は単にまだこの世の中に定義されていない現象を定義する営みにとどまらず、「多様性を受け入れつつ自らを深める」という態度を社会に広げる役割をも果たしうるだろう。分断が深まる時代だからこそ、研究における精神の自由は、それを超えて共生へと向かうための、静かだが確かな希望の源泉となるのである。

参考文献

[1] 佐野 幸恵, 高安 秀樹, 高安 美佐子.(2022). SNS における情報伝播ネットワークの構造. 日本物理学会誌. Vol.77, No.7

[2] 新村出. (1998). 広辞苑. 岩波書店

[3] 榊原統子, 田村浩司, 松本和男.(2023). 21 世紀における日本の医薬品開発の変遷 (2001～2020) ―ケミカルからバイオ, マルチモダリティへの流れ―. 薬史学雑誌 58 (2), 95-99

[4] テイヤール・ド・シャルダン. (1969). 現象としての人間. みすず書房.

[5] テイヤール・ド・シャルダン. (2006). 新訳　神の場―内面生活に関するエッセイ. 五月書房.

[6] 久坂哲也. (2016). 我が国の理科教育におけるメタ認知の研究動向. 理科教育学研究 Vol.56 No.4